

# 環境思想としての道徳哲学

—価値の主観性をめぐって—

柴 田 健 志

## はじめに

ヒュームが事実と価値を別々の領域に区別したことは、哲学史においてよく知られている。ヒュームによれば、善い／悪いというような道徳的な判断に代表される価値判断は、それに対応すべき事実をもたず、したがってその真偽を問うことができない性質のものである。ヒュームの考えでは、価値判断とはわれわれが事実に対して自分の胸の裡に抱く感情的な反応にほかならず、その意味で主観的であることしかできない。価値を主観的なものとみなすこうした主張に対しては、価値に客観性を認めなければならないという反論がもちろん存在する。価値とは感情のようなあやふやなものなどではなく、確固とした実在性をもつという反論である。私は本稿で、環境思想という現代の文脈のなかでこの対立の意味をとらえ直してみようと思っている。私は、価値を主観的なものとしてとらえるヒューム流の見方の方が、より説得力をもった議論でありうるという主張を展開するつもりである。「環境思想としての道徳哲学」という表題にはこのような意図が込められている。キーワードは「人間中心主義」である。まず始めに、議論の全体図を与えるために、このキーワードを中心にして、価値にかんする対立的な二つの見方を、環境思想という文脈のなかに位置づけておく必要がある。

環境保護の思想が決して避けられない問いとして「人間中心主義」がある。それは、環境を保護する理由が人間の福利にもとづいているにすぎないのではないか、あるいはまた、保護されるべき環境とは結局のところただか人間にとって好都合な環境にすぎないのではないかという論難である。人間の利益のために環境を破壊することがかつては「人間中心主義」として批判さ

れた。しかし、80年代からの環境倫理学の議論のなかで、環境を保護すること自体の質が問われ、環境破壊でなく環境保護に対して「人間中心主義」という語が用いられてきているという文脈がある<sup>(1)</sup>。例えば、環境保護の立場から原子力発電に反対する主な理由のひとつに、核廃棄物が未来世代の生活環境を汚染する可能性が主張されるが、この主張そのものは正しくても、やはり人間のためだけに自然を保護せよという主張であり、本来の自然保護ではないとされるのである。「人間中心主義」とは、このように環境保護思想に対する懐疑的な姿勢を表明する言葉である。無論、この言葉によって環境保護そのものが否定されているのではない。むしろ、「人間中心主義」をいう論者は環境保護には積極的である。というより過激ですらある。「人間中心主義」という批判の趣旨は、人間的な視点からの環境保護でなく、むしろ環境そのものに独自の価値を認め、その理由から環境を保護せよという点にある。このような主張は「ディープ・エコロジー」と呼ばれるが、ここで注目すべき点は、環境思想におけるこの対立が、価値に関する哲学上の古典的な対立とまったく同じ構図におさまっている点である。私の立場は、この文脈で価値の主観性を擁護することにある。そこで、「人間中心主義」という批判を行う側の立場を批判することから始めよう。

それを批判するには、生態学のごく基本的な考えを受け入れればよい。自然の事物はたがいに孤立して存在しているのではなく、むしろ相互依存しながら生態系といわれる全体を形づくっており、人間もまたそのような生態系のなかに埋め込まれた存在にすぎない。とすれば、人間的視点から独立した価値を自然に認めること自体、人間を自然という生態系の外部に位置づけ、そこから自然環境をみていることになる。パットナムは、哲学的な世界観として、世界の外に立って世界を鳥瞰する「外的(external)」世界観を「神の見方(God's eyeview)」と呼んでいるが<sup>(2)</sup>、これはまさにパットナムのいう「神の見方」のエコロジカル・ヴァージョンといってよい。しかし、たんなる世界観としてならともかく、エコロジーという知においてはこうした見方は許容されえないであろう。なぜなら、それは、たかだか自然の一部にすぎない

人間が、自分のためにではなく自然のために自然を護ってやらねばならぬという、傲慢な思想の表明と考えられうるからである<sup>(3)</sup>。

ではこれに対して「主観主義」の方はどうであろうか。価値が主観的なものにすぎないことを受け入れて、ただただ人間の福利のために自然環境を保護するという主張は、確かに狭隘に響く。しかし、その印象が確かであるとしても、それは決して「人間中心主義」として批判されるべき性質のものではない。むしろ、価値の客観性を主張する「ディープ・エコロジー」の方にこそ「人間中心主義」への傾斜が認められるのである。さらにいえば、主観主義は「人間中心主義」であるどころか、「人間中心主義」への対抗思想を秘めてさえいる。この三点が私の主張したいことである。これらの主張を納得のいく議論にするために、以下ではいくつかの観点からの敷衍を試みよう。まず始めに「人間中心主義」という言葉の意味内容を整理しなければならない<sup>(1)</sup>。次に、ヒュームに代表される「主観主義」には「人間中心主義」という批判は当てはまらないことを示した上で<sup>(2)</sup>、環境思想としてみられた「主観主義」が、むしろ「人間中心主義」への対抗思想となりうるということを示してみようと思っている<sup>(3)</sup>。

## 1 人間中心主義とは何か

人間中心主義という語の誕生は、歴史的にそれほど遠い過去の出来事ではない。例えば、フランスの『プチ・ロベール』辞典はこの語《anthropocentrisme》の初出を一九〇七年としている。同じ辞典によると、この語の形容詞形である《anthropocentrique》がそれより三十年ほど早く一八七六年の初出になっている。その定義は「人間を世界の中心とみなし、人類の善をすべての事物の目的因とするもの」である。この定義に出てくる「目的因」とは、アリストテレスが整理した四つの原因（形相因・質料因・作用因・目的因）のひとつであり、例えば建築という制作行為の「質料因」が木材や石であるのに対して、その「目的因」は人間の居住であるというように考えればよい。要するに、人間中心主義とはあらゆる事物が「人類の善」つまりは人間の福利と

いう究極目的のために存在しているという説であるところの定義は述べている。ここでわれわれは、この語が十九世紀の終わりに登場したという事実の意味を問わねばならない。なぜならいまの定義に述べられているような考えは、キリスト教世界においてはもっと以前から存在してきたからである。そのような考えがこの時点で特に「人間中心主義」というような語を与えられなければならなかった理由は何であろうか。

これもやはりフランスから出ている『ダーウィン主義と進化』辞典には、「人間中心主義（誤謬）」という見出しの下に以下のような説明がある。短い文章なので全文引用しよう。

ヘッケル『自然創造史』によれば、人間を「地上の創造の至高のしかも意図された目的であり、その他の自然物がすべてそのために創造された存在」とみなす誤謬。ヘッケルはこの「誤謬」を十六世紀にコペルニクスが破壊した天動説の幻想と類比的な関係に置いて、十九世紀において同じようにその誤謬を消し去ったラマルクを、「系統学的」転回を企てた立役者と認めた。

ヘッケルは、イングランドのハックスリと並んで、ドイツにおけるダーウィン主義の受容に積極的に貢献した進化論者である。この引用にあるように、ヘッケルはダーウィンとともにラマルクを高く評価していた。すなわち、人間がすべてのものの目的であるという「誤謬」を、ダーウィン以前に明るみに出したのがラマルクだというわけである。なお、「系統学的」転回」という表現は、カントが自分の哲学をコペルニクスの天文学上の業績になぞらえ、それが後にカントの「コペルニクスの転回」と呼び慣わされるようになったという文脈を踏まえたものであろう。

これでなぜこの見出しが「人間中心主義（誤謬）」という、一見した限りでは意図の分かりづらいものになっていたのかがはっきりする。すなわち人間中心主義という語は、そもそもこの語で指し示される考えを誤謬として指

弾するために造語されたものだったのである。その造語を思いついたのがヘッケル本人であるか否かは詳らかではない。しかしいずれにせよ、十九世紀中葉以来、進化論を支持する一群の学者のあいだに、このような造語がいつ生み出されても不思議でないような思想的な文脈が形成されていたであろうという憶測は十分成り立つであろう。はっきりしていることは、それが誰による造語であれ、その意図が、天動説と同様に人間を世界の中心とみなす神学的幻想を破壊することにあったということである。そしてそのような認識をもたらしたのが、進化論という思想であった。したがって、「人間中心主義」の語を進化論をもたらした認識と切り離して考えるべきではない。

思想的なレベルで進化論がもたらした最も重要な認識のひとつは、人間と他の種との連続性の認識にあると考えてよい<sup>(4)</sup>。それは、人間は自然を超越した存在ではないという、より一般的な主張を含意するであろう。すると、人間が自然の生態系のなかに埋め込まれ、自然環境に大きく依存する形でのみ存在するという生態学的な認識は、進化論的な認識と通底する。そこで、環境思想の文脈においても、このもともとの意味で人間中心主義の語を使用すべきである。それをもっとも単純な形で定式化するとすれば、次のようなものになるであろう。——すべてのものはただ人間のために存在する。

## 2 主観主義は人間中心主義か

私は先に、自然環境の価値を主観的なものとみなす主張と、それを人間中心主義とみなす批判を紹介した上で、生態学的な認識を踏まえたとき、批判の前提になっている後者の立場そのものが成立しえないと述べた。ではこのことは、主観主義に対する「人間中心主義」という批判そのものが誤っているということをも含意するであろうか。私はもちろん含意すると考えている。以下ではこの点を議論しよう。そこでまず、「主観主義」と呼ばれる考えがどのような考えを指しているかを、ヒュームのテキストをもとに示し、それを単純な形に定式化した上でこの点を議論していこう。

ヒュームは『人間本性論』の中で道徳的な価値判断について次のように書いている。少々長いが引用してみよう。

何でもよい、悪(vicious)と認められている行為をとりあげてみよう。例えば、意図的な殺人。それをあらゆる観点から検分し、あなたが悪徳(vice)と呼ぶところの事実(matter of fact)あるいは実在的な存在を発見できるかどうか考えてみよ。〔中略〕あなたが対象を考察しているうちは、あなたはけっして悪徳を捕まえることはできない。あなたが反省を自分の胸の裡に向け、この行為に対してあなたの内にわき起こった非難の感情を見出すまでは、あなたはけっして悪徳を見出すことはできない。〔中略〕悪徳はあなたの内にあるのであって、対象の中にあるのではない。〔中略〕それゆえ、徳と悪徳は音、色彩、寒暖に比較されよう。これら後者のものは、現代哲学によれば対象の中にある性質ではなく、心の中にある知覚なのである<sup>(5)</sup>。

ヒュームは、「意図的な殺人」という具体的な例をもとに、それに対する価値判断（「悪徳」）について考察している。ヒュームの問いかけは、「殺人」という行為そのものが「悪徳」という性質をもっているという通念、一般化していえば、価値というものが「事実」として実在するという通念に向けられていることは明らかであろう。ヒュームは、そのような通念に反し、悪徳は事実としては存在せず、ただ「殺人」という事実に対する「非難の感情」としてのみ存在すると論じている。それは「対象(objects)の中にある性質」ではないという意味で客観的(objective)なものでなく、逆に「心の中にある知覚」であり主観的なものなのである。ヒューム自身は自分の立場を「主観主義(subjectivism)」とは述べていない<sup>(6)</sup>。しかし、ここでヒュームが主張している内容をそう呼ぶことは、ヒュームの意図に反したことではあるまい。そこで、この引用でヒュームが述べている内容を要約する形で、「主観主義」という立場を定式化してみよう。ヒュームは、価値（ヒューム自身の言い方

は「道徳的区別」を「事実」に対置し、価値は「事実」と種類が異なるものであること、その実質は人間の「感情」であることを指摘している。この点から「主観主義」を定式化すれば次のようになるであろう。——価値とは何らかの事実に対する感情的な反応である。

ただし、ヒュームの議論を「主観主義」という用語で要約する際には、用語法から発生すると思われる誤解を避けるために、多少の注意が必要である。というのも、私は今後上のような意味でのみ「主観主義」という用語を用いていくが、この用語はこれとは別の、しかも特に断らない限り混同されやすい意味で用いられることがあるからである。A.J.エアは、この点をよく理解していた。彼自身の立場はヒュームとほとんど同じで、道徳的な価値判断を「感情の表現」とみなすものであるが、エアはこの立場を「ラジカルな主観主義」と呼び、彼が「オーソドックスな主観主義」と呼ぶ主観主義から区別しているのである<sup>(7)</sup>。私は、エアの議論の要点を押さえておくことで、「主観主義」という用語の二つの意味の区別を明確にできると思う。

オーソドックスな主観主義とは、「Xは悪い」というような道徳的な価値にかんする言明は、「私はXを承認しない」という言明に還元することができるものである。

ラジカルな主観主義とは、「Xは悪い」という言明は、それ自体として「X」に対する「たんなる感情の表現」であるとするものである<sup>(8)</sup>。

この区別が重要である。エアはこの点について次のように書いている。

あるタイプの行為が正しいとか間違っているとかいうときに、私は何ら事実にかんする言明をしているのではない。それは私自身の心の状態にかんする言明でさえない。私はたんにある道徳的な感情を表明しているのである<sup>(9)</sup>。

もし「Xは悪い」という言明が「私はXを承認しない」という私の意見、つまりは「私自身の心の状態」についての言明であるとするれば、それは事実

